

「わく星学校」はわくわく生きる所

山下 敬子

わく星学校・主宰

「わく星学校」のわくには、わくわくするような楽しい学校という意味がこめられています。子どもたちがありのままの今をいきいきと生きられる学校があったらと考えていた時、私はカリフォルニアで既成の概念にとらわれないフリースクールに出会いました。それを機に13年間の小学校教師生活をやめ、3年前から何人かの仲間と親たちと共に「わく星学校」を始めました。

現在は9人の子どもたちとその親、スタッフ6人が、小さなわが家を教室に毎日にぎやかにやっています。来ているのは学校に行かない子どもたちと外国の子どもたち。不登校の原因をめぐっては、子育ての失敗、学校管理体制、能力主義などいろいろ言われていますが、私たちはそういうことにはあまりとらわれずにやっています。確かに、「わく星学校」のほとんどの親たちが、子どもが学校に行かなくなってはじめて、子どもにとって学校って何なのだろう、親子って何なのだろうと真剣に考えはじめたのですが。

だからこそ、他からのいろいろな理由づけにとられることなく、自分は何ををしたいのか、どのようにするのが自分らしい生活なのかを、子ども自身が問い直し見つけだしてほしいのです。「わく星学校」に通ってくる子どもにとって、ここは自分で選んで来る学校なのです。

「子ども」をもっぱらおとなへの準備段階としてとらえ、その準備をとどこおりなく進めることに意をはらうあまり、子どもが今を生きる存在であることが忘れられがちです。また、おとなも子どもも、消費社会のなかでいたずらに物とお金に翻弄され、生活実感からほど遠くなった状況にあり

ます。

子どものまわりからどんどん生活が失われているなかで、「わく星学校」を、子どもにとってもおとなにとっても日常を生きる同じ生活者という実感を味わえる場にしたいと思います。

もうひとつ、おとなには、子どもの性格や能力よりも、その子どもが他の子どもやおとななどのような関係を作りあげていくかということに、もっと目を向けてほしいと思います。おとなに都合の良い性格、将来役に立つ能力ではなく、子どもと子ども、子どもとおとなの良い関係のなかで、本来持っているその子らしい性格や能力が自然に発揮されるのを待ってほしいのです。

「わく星学校」では今、山の家をみんなで建築中です。水道もガスもない山の中でキャンプ生活をしながら、おとなも子どもも力を合わせてがんばっています。月2回のこの合宿をとおして、自分が人に必要とされる人間であり、また自分にとってもさまざまな人が必要であるということを学びます。

子どもたちと連れだって歩いていると、不思議と自分がいろいろな人とおだやかでやさしい出会いをしていることに気づきます。子どもには人と人を結びつけるという大事な役割が与えられているのかもしれませんが。「わく星学校」をめぐる人垣のなかから、いろいろなメッセージが送られて、違った視点から幅広くゆったりと子どもをみる目ができていけばいいなあと思います。

心を地球に向けて、わく星に向けてあけはなし、おとなも子どももお互いの命が共にあるよろこびを分かち合いたいものです。